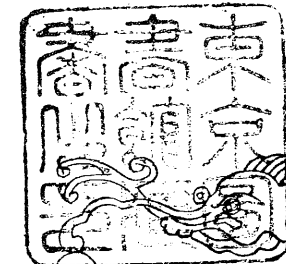


小學新撰脩身書

此卷ハ初等科第三年前期生徒ニ授クル為
ニシテ主トシテ朋友ニ接シ少者ヲ遇スルノ則及
ヒ惡ヲ避ケ善ニ近ツキ約ヲ蹈ミ恩ニ酬ヒ清潔
ヲ好ミ怠惰ヲ戒メ事業ヲ勵ミ光陰ヲ惜ム等
ノ事ヲ教フ

切始

卷七



品久邇宮朝彦親王御題辭



一筆

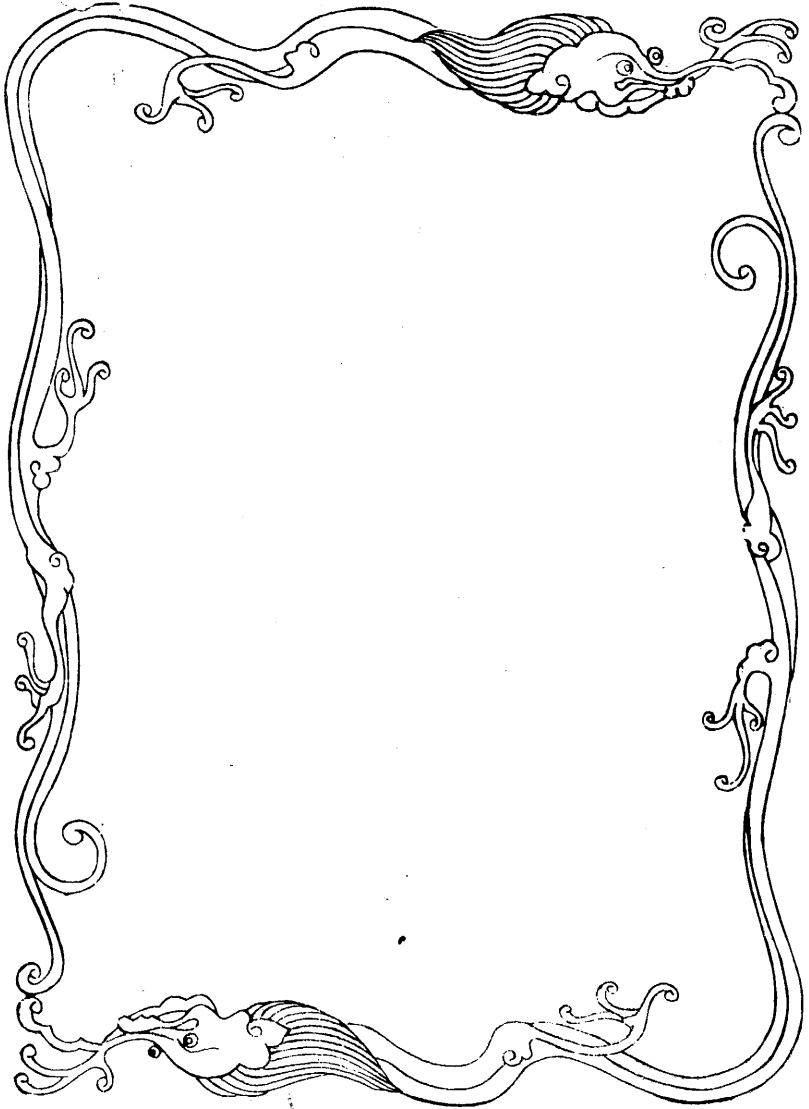


朝彦

朝彦

朝彦

二品久近宮朝彦親王御題辭



學小新撰脩身書卷四

安原時太郎閱

平井義直編輯

第一章

○友をとるよふ人を撰び人の心を
知里て後交里を定むべし知ら
ずしと交れば後悔をもること有り

人心を隠せて知り難し、同く官職を勤め、事ふ出らむ、旅宿を俱よまる等よ、其人よ馴るれば人の心見ゆ 大和俗訓

○用友の交、善を責るる、吾が誠を盡す所以あり、善を取るは、吾が徳を益す所以あり、以て賜を相為

まよ非、然し各其道を盡しが、まよめよまよる所あけをば、則ち麗澤の益、自ら已むおと能ハざる者 あり 朱子

○直友を得難し、而して吾又拒む、お過ちを諱むの聲色を以て、佞人少からむ、而して吾又接するお

小弁集卷之四 朱子

諛を喜ぶの意態を以てま、嗚呼日
びよ悪ふ入らざらんと欲するや

難—— 呻吟語

○朋友ふ交るよるまよるま愛敬
を用ゐるべし然せども信あけれ
ば愛敬も偽よま出でし誠の愛敬
よあらむ顔色をやいらげ容貌を

うやくしくまするも偽りかざせる

ハ愛敬とまべからば 五常訓

○親を親として以て睦よく賢を
友として棄るむ故舊を遺れずを

ば則ち民の徳厚きよ 大學 行義 歸を

○孔子曰く己よ志あざる者を友
とますることあられとよ後しから

新編 呻吟語 卷之四 三十一

ぬ友と見たらばのけむを多くせよ
阿らひ、親しまざるがよし
冥加訓

○人の性行短き所ありと雖も必
ず長き所あり人と交遊するよ、若
し常に其短を見ず、其長を見され
ば、時日も同トく處るべからば、若
し常に其長を念ひ、其短を顧みざ

せを身を終るまで之れは交遊を
と雖も可なり 世範

○孔子曰く、忠告し、善く之を
道びき不可ふを則ち止む、自ら
辱しめらるる勿れ 論語

○大禹謨よ曰く、満ち損を招き、謙
ハ益を受くと、我が才徳を満ち

とあるを、禍ありて損となす、謙ふ
れハ反りて身の益とある 大和俗訓

○益者三友、損者三友、直きを友と
し、諒とを友とし、多聞を友とせしむ
る、益あり、便辟を友とし、善柔を友
とし、便佞を友とせしむるハ損あり 論語
○損友を敬し、速ざらむ、益友を

宜く相親むべし、交る所賢、括よ在
り、豈よ富と貧を論ぜん、君子淡き
おと水の如し、歳久しく情愈く真ふ
る、小人甜きおと蜜の如し、眼を轉
ぶをバ仇人如し 茶餘客話

○學を講じ以て友を會せむ、則
ち道益く明らふ、善を取り以て



仁を輔くを、則ち徳日々に進む
小學

○長を挾まば、貴を挾まば、兄弟を挾まば、友と
ま、友とハ其徳を

友とま、以て挾むおと、何る處から
孟子

第二章

○源扶義スケヨシ曰く、己が心は勝つを、
ハ必まよく人にかち、己が心よま
くるを、のる必ま人よま、故に君
子る己を責む、一念善よ入れば、惡

念の敵責めざるに滅ぶるものな

里 和論語

○菅原長直曰く、善を見聞るよ、
こび、悪を見聞るおとれ、慎むと能
る、今の世よ生きたる賢人とやい
ん 同上

○子弟及奴僕よ對し、其過ちを

たゞさは教を本とまべし、いか
を先だつ處からむ、斯の如くあれ
ば、子弟奴僕の心を得る、恨まなく
志たがひやま、是れ子弟奴僕を
いさむるの要法あり 大和俗訓

第三章

○善を為さば、重を負ふて山よ登

新編 孝行書 卷之三 三十一

るが如し、志已し確しと雖も、力
あほ及むざるを恐る、惡を為さば
駿馬よ乗りて坂を走るが如し、鞭
策を加へむと雖も、足亦止むと
能はむ意雜言

○善る天命賦する所の本然あり、
惡る物欲生むる所の邪穢あり

朱子
格言

○程頤曰く、天下の事、未ど積むよ
由りて成らざるはと非む、家の積
むところのものは善あるを、則ち福
豊子孫よ及ぶ、積むとあるは、善の
不善あるを、則ち災殃後世よ流る

大學衍義補

○人の善を見り己が善を尋ね人

能惡を見了己が惡を尋ぬ此の如く
くみして方よ是れ益あり
朱子格言

○我が善を大ありとも、隠して自ら
ほむべからば、是れ身よ誇らざる
なり、人の善をば小ありとも、顯
はしてほむ處一、是れ人の善を助
くるあり、我が過ちいかにあらば、

了顯ハ一早く改むべし、是れ我が
身の益あり、人の過ちをば顯はま
なからむ、是れ人を害せざるなり、
愛の道あり、君子の心あり
初學訓

○明の薛敬軒曰く、人口を開けば、
皆能く禮義を談し、名節を論じ、利
を見るに及んで、必ず趨り、勢を

見ざる必む附く、又禮義名節の何物たるを知らざるなり

畜德録

○宋の邵康節其子伯温に告げり曰く、汝固より當り善を為さば、亦須らく力を量り、以て之を為さべし、若し力を量らざれば、善と雖も亦為さべからば、同上

○章文懿嘗て言ふ、學者身を奉むるに華侈を好むべからず、苟も華侈を好めば、必む貪り得る處とを致す、他日官に居り、決して清白なる處と能はば

習是編

○人其心に惡念を生ずれば、此一念既に天地の鬼神に棄らせり、禍

を得るの種子を種へたるは至善
念を生むれを此一念既は天地の
神明と與せらるる福をうくるは
種子を種へたるは至善 梧窓湯筆

○邵康節曰く、人の善惡を言ふ形
ハせ行ひよ發し、人ハせを知る、
但心は萌し慮は發し、鬼神ハせ

を知る、ハせ君子獨を慎むゆゑん
あり 劉氏人譜

○凡そ人の人たる所以の者も禮
義あり、禮義の始めは容體を正く
し、顔色を齊へ、辭令を順よするよ
あり、容體正く、顔色齊し、辭令順よ
し、而して後禮義備ふ、以て君臣

を正し、父子親之、長幼を和ぐ、君臣
正く、父子親之、長幼和ぎ、而して後
禮義立つ 禮記

○古語ふ曰く、善よ従ふる登るが
如く、惡よ従ふる崩るが如し 國語

第四章

○恩を施す者も、内己を見む、外人

を見ざれを即ち斗粟も萬鍾の惠
みよ當るべし、物を利する者、己に
施しを計り、人の報を責めを、百鎰
と雖も一錢の功をふし難し 菜根談

○諸葛武侯、子を戒むる書ふ曰く、
君子の行ひを、靜以て身を脩め、儉
以て徳を養ふ、澹泊ふ非ざるを、以

志を明くするはとなく、寧靜は
非ざれを以て速きを致さずとな
し、學を須らく靜あるべきあり、才
は須らく學ぶべきなり、學は非ざ
れを以て才を廣くするはとなく、
靜は非ざれば以て學を成さずとな
なり

三國志

○古人曰く人の施するを念ふこ
と勿れ、施を受けると忘るはと

勿れと、誠は難事とす

袁氏世範

○恩を知りて恩を報むれば、義士
とまるとに足り、恩ありて報ぜざれ
ば、人とまると不足らば

願體集

○漢の照烈帝將ふ終らんとし、後

主よ救して曰く、
 惡小あるを以て
 之を為さると勿
 其善小あるを以
 て為さざると
 勿れ 三國志

○凡そ人の施し



を受け恩を蒙る、或ハ我を君よ薦
 めたる恩あらば長く忘るべから
 ず、折節の禮義を務め勤むべし、久
 くして怠るべからば、或ハ初めよ
 勤むせども、誠少き人ハ後日必
 ず舊恩を忘るを、訪ひ来るおとだ
 しまし、始終一の如くあるべし

大和 俗訓

○司馬溫公曰く、人の恩を受け、
背くよ忍びざる者、其人必ず忠
孝あらんと、此言道理至極せり、然
れを恩を受け、忘る者、忠孝
共よあかる一 同上

○人の性よまると無學ある人、
も、恩を忘るべし、節義を勤め、禮
を欠りざる者、是を其天性の
勝れたる所あり、其善行貴ぶべし、
又尋常の事よ、才あり、惡人な
らざれども、舊恩を忘る者あり、
義ありと謂ふ一 同上

第五章

○天道の流行を微塵も間断休息

なり人としてつとめふく遊樂安
逸を好むを能く天の心も背くこ
と明らざる心正しく身を法とむ
むを禍も轉じて福を生む筆精ふ
曰く戸牖樞は蠹せば流水も腐せ
む是を以て安逸あるを能く常は病
多し

聖學自在

○凡そ内外鶏初めり鳴き咸ふ盥
ふ漱ぎ服を衣枕蓐を斂め室堂及
び庭を灑掃し席を布き各々其事
ふ從ふ

禮記

第六章

○貝原篤信曰く怠情を乃ち衆人
の通病精勤は是れ衆人の良藥

初

○人ハ一生のうち己を是何の道
を能くまべきと思ひとりて萬事
をやめて一事を怠らむなまべし
必しも天下の寶とある處へ空く
光陰を送せるは宗廟の怒り給ふ
道あり謹く思ひとるべきの第

一なる

藤原政忠嘉言

○謂ふを勿せ今日學ばざれば來
日阿ると謂ふを勿せ今年學ばざ
れば來年ありと日月逝ぬ歳我と
延びざ

朱子勸學文

○貝原篤信曰く竊に謂らく人の
學を講じ業を勤むる皆時日能力

を以て去る故に志士は日の短きを
惜む嗚呼此日再び得がごとく今年
重ねて来らば是を以て學者は時日
を惜むとを要す豈時を廢る日
を曠ふを慮けんや 初學知要

○聖人の尺璧を貴ばざると尺寸
の陰を貴とぶ 淮南子

○陶淵明の詩に曰く、盛年重ねて
来らば一日再び晨多きがたし、時
よ及んで勉勵を怠り、歲月人をま
たむ 古文前集

明治十五年五月九日出板版權御願

同年五月三十日板權免許

同年七月刻成發兌

定價金 錢五厘

編纂者

京都府平民

平井義直

上意區第六組蛸藥師町十番戶

出版人

京都府平民

杉本甚助

下意區第五組辨慶石町十六番戶

小學新撰修身書

安原時太郎開
平井義直編纂

五

176
2
50

館籍書會育教本日大			東
一	一	一	丁
一	四	五	一
一	五	八	一
冊	號	架	函

直一冊一册

K110.1
181
5